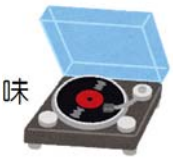
編集後記　叱るで しかし！ヽ(●｀へ´)ノ

アヴニール労務事務所　所長 柿野元博
http://www.avenir-sr.jp
E-Mail avenir4you@gmail.com

今放送されている NHK の朝ドラ「わろてんか」。
物語の中の演芸場の名前は「風鳥亭」とのことです。
「花鳥風月」という言葉がありますが、おそらくは吉本の寄席「花月」をもじったものでしょう。
その昔、僕は「うめだ花月」（平成 20 年 10 月 31 日閉館）が大好きで、よく通っていました。

そのキッカケは僕がまだ 20 代中頃の頃、職場の先輩の結婚式の二次会を幹事として企画した時のこと。
新郎新婦の入場曲は新郎の希望で「トップガン」のテーマ。ついでに司会をお願いした後輩に司会の入場曲の希望を聞くと、お笑い好きの彼は吉本新喜劇の「ホンワカホンワ♪」のテーマにしてほしいと言いました。
ところが 2 人で探し回ってもそのレコード（古！）は見つかりません。そこでうめだ花月に行って演奏者や発売元等、何か情報をもらおうと思いたち、まずは「もぎり」のおばちゃん（失礼！）に聞きました。
そしたら、「兄ちゃん、音響の人に聞いたるわ。ついといで。」と、なんとそのまま音響室に案内されました。
半信半疑でついて行き音響担当のお兄さんに探している理由を話したところ、さらにまさかの展開。
「あれな今販売してないからな。わかった。ダビングしたるわ。ちょっと舞台でも見とき。」
その時、僕は初めて吉本新喜劇の舞台を生で見たのです。しかもタダで。テレビカメラの横で。
いろんな意味で、今の時代では考えられないことです。その時の花月のスタッフさんたちの人間味のある優しくて何ともおおらかな対応に接し、僕はいっぺんに花月のファンになったのです。



当時の花月の客席は厳しい入れ替え制がありませんでした。申し訳ないことですが、近くの阪急百貨店で焼き鳥や弁当やビールを買い込んで朝から晩までいたことも数回あります。新喜劇や漫才を観に来たはずなのに気が付けば「素人名人会」（毎日放送）の収録が始まったりすることもあって、後日会社の先輩に「素人名人会に行ってたやろ。客先にいるとこ映っとったで。」と冷やかされたこともありました。
「やすきよ」（横山やすし・西川きよし）が人気絶頂の時代です。故・横山やすしさんが「怒るでしかし！」のギャグで客席を沸かせていたことを懐かしく思い出します。

話は変わりますが、大相撲の横綱・日馬富士の残念な事件が毎日報道されています。真相はまだわかりませんが、説教中にスマホいじっていた同郷の後輩にカッとなって暴行したとのこと。でも私利私欲によるものでないとしても、また経緯や理由がどうであれ、暴行の事実があるならその責から免れることはできません。
昔、国語の教科書に載っていた小説「**山月記**」（中島敦著）の中で、自分が虎に変身してしまった理由を『人間はだれでも猛獣使いであり、その猛獣に当たるのが各人の性情だ。持って生まれた性情を制御できなかった自分は、虎（猛獣）そのものになってしまった・・』てな感じで告白するシーンがあったと思います。
「虎」の文字は力士のしこ名にもよく使われる字ではありますが、性情をコントロールできないで自分が本当の虎になってしまってはシャレになりません。

日常的に「指導」があるはずの職場においても同じことがいえます。
精神疾患等の原因が業務上であるかどうか否かを判断する労災の基準にも以下のようなものがあります。
「ひどい嫌がらせ、いじめ、又は暴行を受けた」
「嫌がらせ」や「いじめ」が「ひどい」に当たるかどうかは客観的判断によるでしょうが、「暴行」についてはその事実だけでこと足ります。素行が悪い、仕事をしない等といった、そこに至った経緯や理由は全く関係ありません。さらに労災に止まらず、刑事事件にまで発展することも覚悟しなければなりません。
会社や顧客に迷惑を与えた言動を「指導」するなら反省文や始末書をしっかり書いてもらうなり、場合によっては就業規則に粛々と則って懲罰を課すなりして、くれぐれも指導の行き過ぎに発展することがないようにコントロールすることが大切です。今はもう「おおらかな」時代ではないのです。

ちなみに「アンガーマネジメント」によると、「怒る」は自分の損得の為のもので、「叱る」は相手の成長の為のものと、区別しています。
「やっさん」ではない皆さんは「叱るで しかし！」で後輩を指導してくださいね。